



12年前日記

2000年1月17日
(月)

山田夫妻

『12年前日記 2000年1月17日(月)』

【2000年1月17日(月)】*2012年1月17日(火)記

8時30分、起床。はぁ～、今日からまたお仕事かと憂鬱な月曜の朝。今日の不良ぶりも確か七日目。不良ゴッコにも完全に飽きたというか、それなりに反省し、ちゃんと更生して、真人間になろうと思う。もしくは、今のところ不良のお供、スケ番ねえちゃんが出てこないのだからスケコマシ野郎になるか。不良にズベ公ナオンはつきものだから。

とりあえず女の前に金ということで、お堅くマジメなイメージで売っている、クソツタレ銀行に行き1万円を3471Bに両替。

10時30分、二日間慣れ親しんだ高級ルームに別れを告げて、チェックアウト。燦然と光り輝くスカイトレイン(20B)に乗り、安宿街に戻る。一歩進んで二歩下がる。そうさ、あのクソメス犬にリベンジするためにな。

11時30分、ビクビクして損した！ 例の歩道橋の下にメス犬はいなかった。例の仇名事件のあった『White Lodge Hotel』(400B)や、朝食がクソまずいで有名な『Bed and Breakfast Hotel』(380B)や、メス犬に噛まれた記憶が生々しい『Wendy House Hotel』(350B)を横目に、『A one inn Hotel』(450B)にチェックイン。

12時、荷解きもそこそこ、スカイトレイン(15B)に乗り、ワールドトレードセンターの伊勢丹に入っている紀伊国屋書店で親名義のクレジットカードで本(657B)を買う。欲しかったカレン関係の本。

少し歩いて、そごうのマックに昼マック(136B)をしに行き、読書に精を出していた。ここまではいつもと変わらぬ退屈だけど平和な日々だった。

そして、二日連続昼飯マックで、その美しい心がどっかに、たぶん昼マックの神様あたりに届いたのか、ある大事件が起きる。

今度こそ、しょぼくないぞ。ロマンスだ。いや、オフィスラブ物語だ。

これから話す話にはショッキングな反社会的内容が丸出しで含まれます。モロ18禁です。ちょっと酔っちゃったみたい、ホテルで休もうかみたいのが目白押し。

もちろん作りなんかじゃないし、どこかで聞いた誰かさんの話をさも自分のことのようにペラペラ話すわけでもないし、ホント正真正銘のモノホンの話、あくまでうちは実験映画ノリの実験戦場取材実話だから。

恋の話も入れておかないとね。レディを買ったストーリーはココじゃ、ちょっとあれかしら、ハリウッド映画じゃないからね。自称プロ戦場特派員だって人の子男の子、売ってる女を買うのに抵抗はないが、高尚な理由でなく泥臭い理由で、ま、女を買う金はなかったから買えなかった。取材を諦めれば買えたけど、そんな本末転倒なことはいけません。

そういう金の絡まない、キレイな恋の話ね、そんなもののひとつやふたつ適当に見繕ってというか、そんなもんちょいちょいと探せば、確かこの辺に、あ、あった！ てなもんで上手に記憶の片隅から引き出してみせますとも。

不良生活7日目にそろそろスケを出して、パツと盛り上げたいなって頃合にそういうことが都合よく起こることもある。それもまた人生。

正直、ノンフィクションだけど、単なる自慢話みたいになるし、話の本筋とは違うから書きたくなかったけど、どうせ本筋なんてないも同然、ならもう裏筋立てて話しちゃう、人生一度っきり（今のところ）の逆ナン体験赤裸々告白、婦人警官に職質されたってオチじゃねえぞ、お前ら、見とけ、俺のプレイボーイぶりをどうか見守っておくんなまし！

前置きはこのへんにして、さ、はじまりはじまり。とくにご覧あれ。

マックでさっき買ったばかりのカレン族の本を読んでいたら、「あの～、日本人の人ですか」と年の頃なら日本の短大生に逆ナンされる。

ご存知の通り、俺の仕事場は地球全土で、今はバンコクオフィスの昼マック社長室にいるわけだから、現地秘書の面接ってのも職務のうち、そう、うちのうち、よそはよそ。役得役得。顔はそこそこ、体はいい感じ。君、合格！ ある意味、職場恋愛である。公私混同が怖くて、社長が務まるか！

そもそも課長と部長と係長の三角関係でお馴染みの我が社は社内恋愛も社内不倫もとにかくいかなる不純異性交遊であろうと積極的におおらかな社風である。

と一瞬で頭の中面接を終えて、「ええ、日本人ですけど、立ち話もなんですから」と、秘書なりたてを俺の向かいの席に座らせる。まだ隣や膝の上ってのは職権乱用が早すぎるから。

いや～、書いてて思うね、嘘くせ～、でも本当だもん。

でもホントホント。とにかく昼マックで読書する仕事をマジメにこなしていたおかげで逆ナンされたわけ、日本男児なら、いや、日本語の本読んでいるオスなら誰でもいいわ、カモンっていう懐の深い逆ナンではあるが。

まあ、ぶっちゃけ、毎日逆ナンされてもいいくらい俺ってばイケメンなのに、24年間で初めて逆ナンされたこと自体がおかしいちゃおかしいんだけどね。

んで、なんでも秘書曰く、仲良し女子短大生3人組で早めの卒業旅行でタイに来たが、最初に行ったプーケットで二人が食中毒で寝こんでしまったので、仕方なく先にひとりでツアーの予定通りバンコクに来たと。今は自由時間でデパートを見てて、この近くに行きたいお店があるけど、どう行けばいいか分からず迷っちゃって、とりあえずお腹が空いたからマックに入ったら、運命の出会いがとのこと。

とりあえずの福利厚生で、「それは大変だったねえ。とりあえずポテト食べる？ ココだけの話、ケッチャップつけ放題だよ」と我が社の社食の素晴らしさをアツピ〜ル。どうせ、こうやって秘書をまんまと愛人にしてるんでしょ、普通の会社じゃみんな、薄汚いケッチャップな手口手籠めで。もちろん最初からそのつもり、ケチャマンの日だって構うもんか、ですってよ。

書けば書くほど嘘の上塗り感がてんこ盛りされる気が...おかわり！

なんたら市場のなんたらっていう店に行きたいと言う。一応、ガイドブック片手に説明したが全然分からないみたいなので、社長さんも同伴し、一緒について行くことになる。

マックを出て、社車のタクシーに乗るとメーターが前の客が乗ったままなので、「元に戻せ」と社長の太っ腹を見せつける。

「何されてるんですか？ 学生さんですか」と口調は丁寧なんだけど、どこか馴れ馴れしいソープ嬢との会話みたいのをタクシーの中で交わす。

どこにスパイがいるか分からないから、いつもは身分は明かせないとか言っているくせにだが、このお抱え運転手は絶対日本語分からない、大丈夫と判断し、「3月までは学生だったけど、今は社会人で戦場特派員やってる」と一応警戒し、自称プロは取って簡単に自己紹介しておく。今思ったが、社会人と戦場特派員って食い合わせ最悪な感じだな、腹ピ〜ピ〜。

後は名前だ、年齢だ、出身地だを聞いた後しばし、クーラーの轟音が狭い車内を占める。仕方なしにテレクラっぽい会話再開。

「もうどれくらいバンコクにいるんですか」

「はあはあ。もうかれこれ一ヶ月ちょいかな。パンツ何色？」

「ちょっとした短期留学ですね」

「まあ、そんな学生さんみたいな甘っちょろいもんじゃないけどね。今、内務省に難民キャンプの取材許可証を申請していて、その結果待ち。もうバンコクの国連高等難民弁務官事務所や国境なき医師団の取材は終えちゃったから早く現地に行きたいんだけどね。まあ、待つのも大事な仕事のうちだから。パンツ何色？」

と確かにごもつともな意見を言った後、よくよく考えたら、この女は女スパイかもしれないので、バンコクで体調崩してチェンマイ静養に行っとうんこ漏らした話や野良犬に噛まれてビックリした話は職業的守秘義務本能から伏せておいた。

そんなこんなで無事に目的地に到着。ちなみにタクシー代は当然秘書が払う。どこの世界に自称プロ戦場特派員にタクシー代を払わせるようなバカ女がいるんだ。バンコクの、いや世界中のエチケットだぜ。淑女の皆さん、自称プロ戦場特派員に金を出させちゃ、女の恥、女が廃りませぬ。

一緒にグダグダお買い物して、「じゃあ、スケートでも行かない」って流れに。近くにあるワールドトレードセンターは8階にアイススケートリンクがあるのを前に館内案内で発見し、ずっと行きたかったけど、さすがに仕事サボってひとりでスケート行って、まんまと骨折とかしたらカッコ悪い名誉の負傷になっちゃうじゃん。

せめて仕事サボって、女とスケートデート中に骨折のほうがカッコいい名誉の負傷みたいで聞こえがいいから。

この急な流れが作りっぽいからこそ、本当っぽいわけで。青春ってそういうもんじゃん。

とりあえずホテルにたくさん買った荷物を置いて、スケートできる服に着替えに行くという流れになる。

おいおい、真昼間からなんだこの急展開わ、セックス誘われちゃったよ。

真っ昼間から初対面の男をホテルに連れ込むなんて、あ、アナタが今思い浮かべたのときと一緒に、じゃあ、せ〜の〜、俺に一目惚れ、え、誰だ、美人局だ、売女だ、新手のホテルだと言ったのは、拳げ句の果てに言うに事欠いて女スパイだと、言っていることと悪いことの区別くらいつかんか、毎日マックでブラブラしているだけの俺に女スパイなぞ、まあそういう展開もありっちゃありで、逆に悪くないかも。

またタクシーで、秘書のホテルに向かう。車中、昨晚、ひとりでキックボクシングを見に行ったら、試合を終えてリングから降りてきたムエタイ選手に「今晚俺を買わないか」と言われたなんて話を。まあ、聞いたことあるようなお話だけど、だからこそね、この女の話のほうが胡散臭いでしょ、俺なんかの話より。

美人局も時にまたよし。騙されてみる器のでかさも必要だろ、しかもものすごくヒマなんだし、退屈しのぎになれば騙されてもいい身ぐるみはがされても。俺を買いたいなら買うがいい。在庫一掃の叩き売り大バーゲンだ。

ホテルに着く。俺がこの前泊まった高級ホテルより全然いい某有名ホテル、いくらツアー特典で有名ホテル宿泊つきとは言え、親のすねかじりの女子短大生のくせに。隣の親のすねは太く見えるとはいえ。

でっかいロビーで待ってても言われないので、フラフラ部屋までついていく。

物陰にムエタイ選手が潜んでいるタイプの美人局じゃないかと部屋を見渡ししながら、もしそうだったら3Pかあ〜と未来予想図。

とりあえずムエタイはいないし、洗面室に着替えに行った女をおとなしく部屋の中で待っているというのもアレだし、こういうとき、つまり女にマックで逆ナンされて、買い物付き合っ、スケート行く前にとりあえず荷物が多いし、着替えたいから一旦ホテルにいくとホテルの部屋につれこまれたとき、とりあえず「ヤラせろよ。どうせ最初からそのつもりだったんだろ」と押し倒して一発やっちゃうのが男のコの礼儀かと思ったが、これからスケートするのに足腰立たなくなるのもアレだから、まず前戯のスケートしてからという焦らしプレイ選択。

着替えて出てきた秘書のちょっと不満顔に選択ミスを感じる。やっぱソッチかあ〜。もう滑っちゃったみたい、ススイのス〜イ。

まあいいやととりあえずタクシーで、ワールドトレードセンターは8階のアイススケートリンクへ行き、スケート前戯プレイ。

もちろんアイススケートの入場料とか貸し靴代とかジュース代も全部女持ち。いちいちワリカンにしようかと言うのもアレだし、リーマン戦場特派員以外、自称プロ他称プロを問わずフリーランスの野良犬戦場特派員なんて小銭すら持ってないのは世界共通認識なんだから、女がサッと払っておけばいいんだよ。彼女も若いのにちゃんとそのへんの世間の機微ちゅうもんが分かっている。よくできた秘書だよ、もうけもん、いい拾い物だったね。

たっぷりスケート前戯プレイで汗を流し、足腰フラフラになって外に出たら、南国のでっかい太陽が地平線に沈んで、シッポリと南国ムード漂うナイト。行きつけの店があるんだとマックや8番ラーメンではなく、当たり前だろ自腹じゃあるまい、おごりでそんな豚どものいく店に行くか、東急にある日本料理屋にタクシーで乗りつける（女払い）。

いや〜、飲んだねえ、タダ酒、食ったねえ、タダ飯。だもんで、日本料理屋の途中から記憶がない。

ふと気付いたら、俺はフカフカのソファに腰掛けていた。辺りを見渡すとどこか見覚えのある高級ホテルのふきぬけのロビーみたいところで、シーンと静まりかえったところに俺が悪態をつく大声がこだましている。

見たことない日本人の若い男が「大丈夫ですかお静かに」と繰り返している。ここはどこ？
私は誰？ お前は誰？

なんじゃ、こりゃ～。夢か現か、どうやら現のほうらしい。

どうやら秘書の泊まっていたホテルのロビーで、日本人のホテルマンになだめすかされている真っ最中だったらしい。秘書の姿はない。

時計を見ると23時過ぎ。よく分からぬまま、日本人ホテルマンに見送られ、ホテルからメータータクシー（51B）に乗って（自腹）、俺のボロホテル着。そのままバタンキュー～。

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ～。

『12年前日記 2000年1月17日(月)』

<http://p.booklog.jp/book/42646>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42646>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42646>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.